障害者を、納税者に

「いつか、障害者を納税者に」の思いで、B型施設を始めた「はとぽっぽ倶楽部」。「いつか」では、夢。夢に日付を入れて、目標に変える。豆腐事業に新しく二つの事業――養鶏、紅花を加えて、目標となるか。武田塾長の診断は如何に？

編集部＝文
text by Kotonone
岸本 剛＝写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

武田塾の卒業生を追って 2

特定非営利活動法人 障害者の地域生活を支援する会〈はとぽっぽ倶楽部〉

なぜ、障害者は、街で暮らせないのか

「はとぽっぽ倶楽部」は、レスパイトサービス（※1）からスタートした。お母さんや家族に用事ができた時、障害児を一時的にお世話する仕事だ。

理事長の佐藤恵美子さんは、大学卒業後、厚生省管轄の福祉関係の専門学校で学んだ。「自分は、ふつうの家庭で生まれて、たいした苦労もなく大人になった。障害のある人は、生きるだけで大変な苦労があることを知って、ショックだった」。生きることへの戸惑いが、障害者福祉への道を開いた。

一年間学んで、千葉の施設に就職した。勉強しているときに、アメリカでは入所施設を全廃した州があることを知った。佐藤さんの勤める施設には、家族から離れ泣く泣く施設に連れられてくる障害者もいる。「当時は、家族とともに障害者が暮らすための環境も乏しかった。家族もやむなく手放さざるを得なかった。子どもは、一晩泊まるのか、一カ月なのか、一生なのか分からないまま…」。なんとかできないものか。山形で「はとぽっぽ」を始めるまでずっと棘となって残っていた。

「はとぽっぽ」で、佐藤さんに深く信頼される職員の小嶋市子さんも、勤めた施設で「刑務所みたいだった。日中は動かないように縛られていて、寝る時も紐を掛けられている。ご飯を食べる時も、テーブルに結ばれていた」光景を目にしたこともある。

「施設をつくるなら、足の便のいいところ、利用しやすいところと思って、街中にこだわりました」と佐藤さんは山形駅から車で一〇分ちょっとのところで始めた。

風邪も引けない、と追い詰められるお母さん

「はとぽっぽ」がスタートした約二〇年前、山形にも、一時的に障害児を預